

紀要

37

- 草津市・北谷古墳群L地点出土埴輪について
 — 湖南地域出土埴輪資料の基礎的検討 — 辻川 哲朗 (1)
- 横穴式石室の構築原理を考える
 — 研究ノート：岩橋型石室を題材として — 堀 真人 (15)
- 福林寺12号墳の墳丘測量調査報告 宮村 誠二 (28)
- 近江出土の渡来銭貨 (2) 小島 孝修 (33)
- 近江における中世備前焼の基礎集成 山口 誠司 (49)
- 長浜市八雲書院資料調査報告〈瓦編3〉 福井 知樹 (57)
- 三次元データを歩く
 — 三次元データの利活用を目指して — 福井 知樹 (73)

近江における中世備前焼の基礎集成

山口 誠 司

目次

1. はじめに
2. 備前焼の出土例
3. 出土傾向と流通のあり方
4. おわりに

— 論 文 要 旨 —

六古窯の一つである備前焼は中世の日本列島において広く流通したやきものである。近江における六古窯については信楽焼や常滑焼、瀬戸美濃焼が目立ち、備前焼は比較的少量で客体的な存在である。全国的な中世備前焼の分布については伊藤晃氏らによって各地の発掘調査成果から集成が行われているが、ここでも近江での出土量は極めて少ない印象を受ける。

伊藤氏らによる集成から約 20 年が経過し、その間の出土事例の増加が考えられることから、本稿では再度、近江での事例集成を行うとともに、近江国内の詳細な状況を確認することで、具体的な備前焼の流通に迫ることを試みた。まず出土事例を列挙し、時系列順にみた出土量・器種・分布状況を検討したところ、14 世紀前半から出土量が増加すること、当初、甕が主体であったのが次第に擂鉢が主体となっていくこと、16 世紀以降は湖東地域から湖北地域にかけての分布が密になる傾向を読み取ることができた。また、検討対象を擂鉢に絞ってより詳細な流通のあり方に言及することを試み、分布の偏りや遺跡単位で見たときの出土量の偏差を明らかにした。

——— キーワード

中世 近江 備前焼 生産 流通 使用 擂鉢

1. はじめに

備前焼は岡山県備前市伊部を中心とした地域で生産されてきた六古窯の一つにも数えられる西日本を代表する焼き物である。12世紀から生産が始まり、14世紀前半からは備前国外での出土例が増え、15～16世紀には北は青森県から南は沖縄県までに見られる広域流通品となる。

中世備前焼の全国的な分布については伊藤晃氏が膨大な発掘調査成果から集成を行っており、全国で1,605遺跡、12,000点以上の備前焼が確認されている（伊藤 2005）。この集成では近江の事例も集められており、計18点が確認されているが、他国の集成結果と比較してみると極めて少量である印象を受ける。実際、近江における中世の六古窯製品の分布状況をみると、信楽焼・常滑焼・瀬戸美濃焼が目立ち、備前焼はやはり目立たない存在である。

しかし、先述した集成が行われた後、備前焼の出土が複数報告されており、その分布や時期を再検討することには意義があると考えられる。また、伊藤氏の集成は全国的な傾向を明らかにする立場からなされたものであるため、近江国内の詳細な状況を確認することで、具体的な備前焼の流通に迫る一助にもなるであろう。本稿では近江全域を対象に備前焼の分布・流入状況を確認するとともに、時期や地域による特徴について若干の考察を加えていきたい。

2. 備前焼の出土例（表1・図1）

今回、再集成を行った結果、計26遺跡で備前焼の出土を確認した。この結果には伊藤氏らによる集成作業以前の報告資料も含まれているが、具体的な流通状況への言及を目指す立場から、改めて出土遺跡名と器種、時期について確認することとした。器種別にみると甕・播鉢が全体の約6割を占めており、生産開始当初からの主要器種の一つである壺は少ない傾向にある。

資料の時期・分類についてであるが、数量の多い甕・播鉢については重根弘和氏による分類（重根 2016・2022）を用い（1）、その他の器種について、徳利、水屋甕は乗岡実氏の編年（乗岡 2013・2017）を用いる。なお、紙幅の都合から本文中では甕・播鉢が出土した遺跡を主として取り上げることとし、その他の器種の事例については表1にまとめた。

上仰木遺跡 平成4年に行われた発掘調査で鎌倉時代から室町時代にかけての邸宅跡が検出され、遺物包含層から重根分類ⅣB（15世紀前半～16世紀初頭）の備前焼播鉢（1）が出土した。出土遺物に外国産陶磁器の優品が多く含まれることなどから、検出された邸宅は延暦寺との密接な関係が推定されている（大津市教育委員会 2013、以下、教育委員会は教委と表記）

坂本遺跡 発掘調査によって上坂本と下坂本を結ぶ松ノ馬場通り沿いに長方形の屋敷割がみられる両側町が形成されていたことが明らかとなった。出土遺物については、15

世紀後半を数量的なピークとしているようである。重根分類ⅣA（14世紀前半～15世紀前半）の甕が2点、ⅣBの播鉢が1点報告されている（吉水 2006）。

坂本城跡 元亀2年（1571）、明智光秀により築城された。山崎の戦い後に落城するが、再整備され浅野長政が城主となっている。天正14年（1586）に廃城となった。本丸推定地付近で行われた発掘調査では、礎石建物・石組井戸・石組土坑などの遺構のほか土器・陶磁器・瓦が多量に出土した。報文では出土遺構・層位が明確ではないが、重根分類ⅣB・ⅤA（15世紀末～16世紀後半）の甕各1点、重根分類ⅤAの播鉢1点（5）が出土している（大津市教委 2008）。

日吉神宮寺遺跡 日吉社の八王子山の奥に位置し神宮寺伝承地として知られていた地点にあたる。発掘調査で室町時代の南北4間×東西3間の礎石建物が検出され、絵図等との照合から神宮寺に相当するとみられる。重根分類ⅣB（2）の播鉢が出土している（大津市教委 2016）。

宮ノ谷遺跡 埋甕遺構より重根分類ⅣBの備前焼の甕が出土している。頭蓋骨と思われる骨片を伴っており、甕棺として用いられたものであることがわかる（大津市教委 1982）。

関津城遺跡 16世紀代を中心に機能した城郭である。備前焼については甕4点・徳利2点が出土している。甕は重根分類ⅣA・ⅣB、徳利は中世6期と思われる。甕のうち3点が礎石建物に伴う埋甕遺構からの出土であり、内訳はⅣAが2点、ⅣBが1点である（34・35）（滋賀県教委ほか 2016）。

上田上牧遺跡 古墳時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。平成8年に行われた発掘調査では中世から近世にかけての集落跡が見つかった。16世紀～18世紀の遺物を含む整地層から重根分類ⅤBの播鉢1点（3）が出土している（滋賀県教委ほか 2000）。

植城遺跡 幅約9m、深さ約3mを測る堀の底面から重根分類ⅣAの甕（32）が出土した。また、堀の第1層からも器種不明ながら備前焼が出土している（滋賀県教委ほか 2006）。

欲賀遺跡 縄文時代から中世にかけての集落遺跡である。平成6年に行われた発掘調査では中世の遺構が多数見つかり、備前焼も重根分類ⅣAの甕が2点出土している（40）（守山市教委 2001）。

上永原遺跡 これまでの発掘調査で戦国時代の寺院跡や方形屋敷地群の存在が確認され、隣接する永原城との有機的な関係が想定されている。屋敷地の井戸（SE02）の井戸枠外側より重根編年ⅤB（16世紀後半～17世紀初頭）の播鉢（7）が出土しているほか、遺物包含層からⅣBの播鉢（6）が出土している（野洲市教委 2008）。

比江遺跡 弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。個人住宅の建替えに伴う発掘調査で、土坑（SK01）

表 1 備前焼出土遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	器種	報告書中番号	図1中の番号	時期・分類	出土遺構・層位	文献
1	上印木遺跡	大津市上印木	甕鉢	451	1	ⅧB	包含層	大津市教委2013
2	坂本城	大津市下坂本	要	88	28	ⅧB	?	大津市教委2001
			要	89	29	ⅧA	?	
			甕鉢	81	5	ⅧA	?	
3	坂本遺跡	大津市下坂本	要	174		ⅧA	?	吉水2006
			要	175		ⅧA	?	
			甕鉢	170		ⅧB	?	
4	日吉神宮寺遺跡	大津市坂本5丁目	甕鉢	53	2	ⅧB	礎石建物	大津市教委2016
5	宮ノ谷遺跡	大津市石橋	要	31		ⅧB	SK(土坑遺)	大津市教委1982
			要	493	35	ⅧA	埋藏遺構S7	埋藏遺構S7
			要	494	34	ⅧB	埋藏遺構S7	埋藏遺構S7
			要	495		ⅧA	埋藏遺構S7	埋藏遺構S7
			要	514		ⅧA	井戸S9	井戸S9
6	關津城	大津市関津	徳利	479		中世前期?	溝S2	
			徳利	627	4	近世1a～1b期?	包含層	
			甕鉢	444	3	V8	遺物包含層	滋賀県教委ほか2000
			要	65	32	ⅧA	堀(礎)	滋賀県教委ほか2006
			不明	66		—	堀(第1層)	
9	欲賀遺跡	守山市欲賀町	要	633	40	ⅧB	S06	守山市教委2001
10	上水原遺跡	野洲市宮原・上原	甕鉢	13	7	V8	SK10	
			甕鉢	177	6	ⅧB	遺物包含層	野洲市教委2001
			要	1	37	ⅧA	S001	野洲市教委2016
12	余内遺跡	近江八幡市多賀町など	甕鉢	52	8	ⅧB	S01第2層	近江八幡市教委1984
13	堂ノ内遺跡	近江八幡市千幡供町	徳利	24		中世6期	SK1A上面	近江八幡市教委1984
			大皿	23/265	11	—	大手道区ST11	滋賀県教委ほか1993
			徳利	23/283		近世1a～1b期	大手道区ST11	
14	安土城跡	近江八幡市下豊洲	大皿	44		近世1a～1b期	A区変地層	滋賀県教委ほか1994
			大皿	128		—	A区第2遺構面	
			徳利	150		近世1a～1b期	A区西斜面崩落土	
			大皿	151	12	—	A区西斜面崩落土	
			徳利	95		近世1a～1b期	東側石壁E4・T1線上段曲輪	滋賀県教委ほか1995a
			要	3		—	—	滋賀県教委ほか1995b
			要	358		V8	三の丸1-1段含質土・ 埴土色土	滋賀県教委ほか1995a
			要	359	38	V8	三の丸1-2段含質土・ 埴土色土	滋賀県教委ほか2002
			要	360	39	V8	三の丸1-3段含質土・ 埴土色土	
			甕鉢	47	17	V8	大走牧遺構1上面崩落土	滋賀県教委ほか2005
			要	6		—	西側溝	滋賀県教委ほか1995b
			短頸壺	24		—	B地区北耳溝	
			短頸壺	25		—	南辺石垣裏面崩れ	
			皿	13		—	崩落土	滋賀県教委ほか1997
25	小谷城跡	長浜市湖北町伊都など	徳利	27		—	崩落土	
			大皿	38		—	崩落土	
			大皿	39		—	崩落土	
			大皿	89		—	暗渠	
			水指	109	13	—	暗渠	
			水指	110	14	—	暗渠	
			甕鉢	111		V8	暗渠	
			要	120		—	虎口入側溝	
			香炉	25		—	現況石垣B8段込め	滋賀県教委ほか1998b
			香炉	26		—	現況石垣B8段込め	
			大皿	27		—	現況石垣B8段込め	
			煎水	79	15	—	側溝状遺構内	
			煎水	80	16	—	側溝状遺構内	
			水屋要	187	10	近世1a～1b期	C・D区崩落土・ 石垣132段内	滋賀県教委ほか2007
26	雨森遺跡	長浜市高月町雨森	徳利	30	9	—	礎石遺構遺構面	滋賀県教委2009

No	遺跡名	所在地	器種	報告書掲載番号	図1中の番号	時期・分類	出土遺構・層位	文献
15	安土城下町遺跡	近江八幡市下豊洲など	要	栗洲図本掲載		?	築地IV	安土町教委1986
			要	栗洲図本掲載		?	SE2	
			鉢	栗洲図本掲載		?	SE4	
			要	栗洲図本掲載		?	溝1	
			要	栗洲図本掲載		?	遺構Ⅱ	
			要	44		ⅧB	柵溝(遺構Ⅱ)	
			(要)	12		ⅢA?	SD8-5	近江八幡市教委2012
			(要)	46		—	SE9	
			要	448		ⅧA	SV2	
			要	592		ⅧB	SV2-4	
16	百濟寺遺跡	東近江市百濟寺町	要	593		ⅧA?	SV2-4	
			要	615		—	SV2-4	
			要	746		ⅧA	SV3	
			要	747		ⅧA	SV3	
			要	878	33	V8	SE201井垣内	
			甕鉢	277		V8	SV2	
			甕鉢	842	18	V8	北区あけ土	
			徳利	538		近世1a～1b期	SV2-3	
			要	81		ⅧA	不明	滋賀県教委2005
			要	363		ⅧA	埋藏遺構	滋賀県教委2003
17	鞍馬寺石仏堂遺跡	多賀町鞍馬寺	要	369		ⅧA	埋藏遺構	
			要	365	36	ⅧB	埋藏遺構	
			要	栗洲図本掲載		?	表張	多賀町教委2005
			要	栗洲図本掲載		?	T4石垣3北側石垣 面上到土	多賀町教委2008
			要	栗洲図本掲載		?	T4北東側段層1	
			要	栗洲図本掲載		?	T7基土	
			要	栗洲図本掲載		?	T7建物包含層	
			要	栗洲図本掲載		?	T9北側遺物包含層	
			小型壺	655	19	—	SD482	滋賀県教委ほか1989
			要	723	30	ⅧA	ピット	
20	古鹿崎遺跡	彦根市白夏町	徳利	51		—	15トレンチ第1遺構面	彦根2020
			要	栗洲図本掲載		?	T5上層遺構面	滋賀県教委ほか1988
			要	栗洲図本掲載		?	T1上層遺構面	
			要	栗洲図本掲載		?	T1上層遺構面	
			要	栗洲図本掲載		?	T4第2層	
			要	栗洲図本掲載		?	T4第2層	
			要	栗洲図本掲載		?	T3第3層	
			要	栗洲図本掲載		?	T3第3層	
			徳利	栗洲図本掲載		?	T7下層遺構面SD	
			徳利	栗洲図本掲載		?	T3下層遺構面	
21	肥田城	彦根市肥田町	甕鉢	354	20	V8	T3第4層	
			甕鉢	61a・61b	21	ⅧA	2-4区S001	滋賀県教委ほか2013
			甕鉢	482		V8	城下町2-2区S005	
			甕鉢	536	22	V8	城下町2-2区S011	
			甕鉢	537		V8	城下町2-2区S011	
			甕鉢	597		V8	城下町2-3区S005	
			甕鉢	598a・598b	23	V8	城下町2-3区S005	
			要	39		ⅧB	?	
			大皿	37	26	—	焼土層	米原市教委2006
			大皿	103	24	—	焼土層	長浜市教委2002
24	長浜城遺跡	長浜市北船町など	大皿	104	25	—	焼土層	
			大皿	105		—	焼土層	
			徳利	146	27	近世1a～1b期?	焼土層	
			要	82	31	ⅧA	?	湖北町教委ほか1988
			要	84		—	?	
			要	85		—	?	
			要	88		—	?	
			要	89		—	?	
			徳利	91		—	?	
			徳利	95		—	?	
26	雨森遺跡	長浜市高月町雨森	要	106		V8	—	滋賀県教委ほか1982

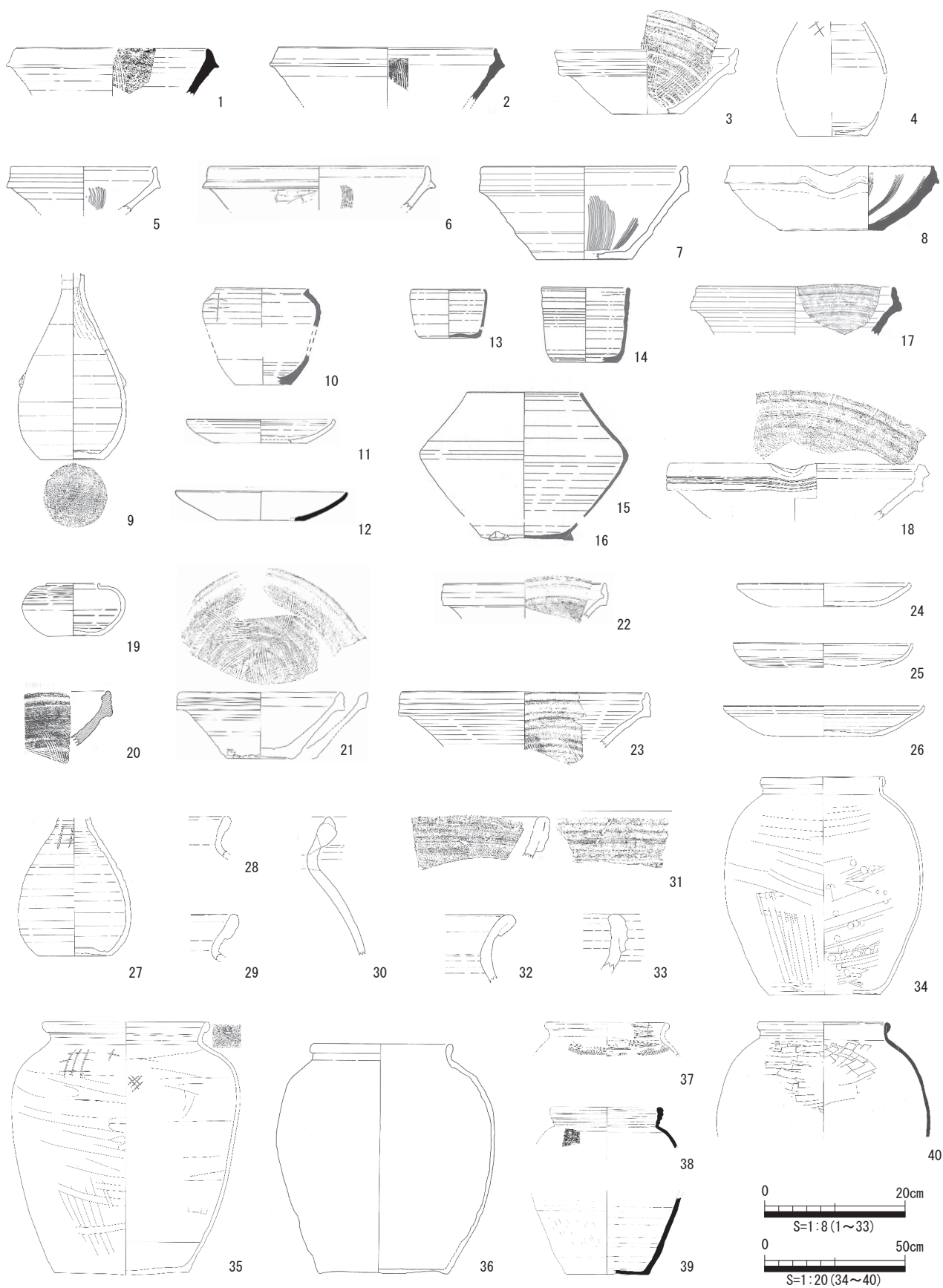


図1 近江出土の主な備前焼(資料番号は表1「図1中の番号」に対応)

から14世紀代の土師器皿・羽釜などと共に重根分類ⅣAの甕(37)が出土している(野洲市教委2016)。

余内遺跡 発掘調査で埴・仏法具・瓦などが出土しており、現在も余内にある興隆寺あるいは円満寺に関わる遺構と推定されている。備前焼についてはSD1出土の重根分類ⅣBの播鉢(8)がある(近江八幡市教委1984)。

特別史跡安土城跡 天正4年(1576)に織田信長の居城として築かれた。天正10年の本能寺の変後の混乱の中、天主をはじめとする中心部が焼失しているが、その後、三法師(織田秀信)が入城している。天正13年に廃城となった。

大手道周辺を中心に甕・播鉢・徳利・水指・建水(9～17・38・39)など多種多様な備前焼が出土している(滋賀県教委ほか1993など)。

安土城下町遺跡 安土城下町は安土山と西の湖に挟まれた平地に位置する。下豊浦の十七地区21次調査では16世紀中葉～後葉の遺構が多数見つかり、多数の土器・陶磁器が出土した。区画溝などから備前焼の甕・播鉢(18・33)・徳利が出土している(近江八幡市教委2012)。

百済寺遺跡 湖東三山の一つとして知られる天台寺院である。本坊西側の駐車場拡張工事に伴う発掘調査で埋甕遺構が検出され、そのうち西側3基で常滑焼の甕が、東側3基で備前焼の甕が確認されている(愛東町教委2003・明日2017)。ほぼ完形に復元されており、個々の資料の年代観は重根分類ⅣAと重根分類ⅣB(36)のものがある。

肥田城跡 織豊政権下では蜂屋頼隆、ついで長谷川秀一が城主となっている。秀一は文禄の役中ないし帰国後に病没し、当城も廃城となった。織豊期の城下町推定域である小字「西町」・「東町」では遺物包含層から重根分類ⅤBの播鉢(20)が出土している(滋賀県教委ほか1988)。

妙楽寺遺跡 弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。昭和60年・62年に行われた発掘調査では、SD482から小形壺(19)、柱穴から重根分類ⅤAの甕(30)が出土している(滋賀県教委ほか1989)。

佐和山城跡 鎌倉時代に居館が営まれたことが始まりとされる。織豊期には丹羽長秀・堀秀政・堀尾吉晴・石田三成が城主となっている。関ヶ原の戦いの後、井伊直政が入城するが、慶長9年(1604)、廃城となった。東麓で発掘調査が行われており、城下町推定域では区画溝(SD05・11)から播鉢(22・23)が複数点出土している。これらはいずれも重根分類ⅤBに位置づけられる。また古絵図で「侍屋敷」とされる小字「奥の谷」においても区画溝(SD01)から重根分類ⅥA(17世紀前半)(21)の播鉢が出土している(滋賀県教委ほか2013)。

鎌刃城跡 京極氏・浅井氏と六角氏の勢力圏の「境目の城」として知られる。六角方の城として築かれるが、後に城主の堀氏は浅井方となる。浅井長政が織田信長と敵対すると堀氏は織田方に内応した。浅井氏滅亡後、天正2年(1574)に堀氏が肅清されると廃城となった。発掘調査の結果、石

垣や枳形虎口、礎石建物の存在が明らかになった。重根分類ⅣBの甕が出土している(米原市教委2006)。

長浜城遺跡 天正2年(1574)、浅井氏旧領を与えられた木下秀吉により小谷城に代わる居城として長浜城が築かれた。築城に伴い城下町が建設され、元和元年(1615)に廃城となった後も在郷町として機能していく。下村藤右衛門邸跡で実施された発掘調査では、城下町期の遺構とそれらを覆う焼土層が確認され、多量の土器・陶磁器類が出土している。焼土層は天正13年の天正地震に伴って発生した火災によるものと考えられる。備前焼には盤・大皿・徳利が見られる(24～26)(長浜市教委2002)。

小谷城跡 浅井氏の居城で築城は永正13年(1516)とされるが定かではない。長政の代に織田信長と同盟関係を結ぶが、後に敵対し元亀4年(1573)、織田方により落城し浅井氏は滅亡する。その後、小谷城には木下秀吉が入城して長浜城築城まで居城とした。山上部の整備事業に伴う発掘調査で甕(31)・徳利が出土している(湖北町教委ほか1988)。

雨森遺跡 古墳時代から江戸時代にかけての集落遺跡である。上水道事業に伴う発掘調査で重根分類ⅤBの甕が出土している(滋賀県教委1982)。

3. 出土傾向と流通のあり方

(1) 時系列順にみた出土量・器種・分布状況

早い段階の資料として安土城下町遺跡でⅢB(14世紀前半)の甕が見られる。資料数が増加するのはⅣA(14世紀前半～15世紀前半)からで、複数の遺跡で散見されることが明らかとなった。全国的に見ても14世紀中頃以降、備前焼の出土点数は急増することが明らかになっており(伊藤2005)、近江国も全国的な傾向に合致するようである。ⅣB(15世紀前半～16世紀初頭)の甕はⅣAよりも微減するが、この段階には甕に加えて播鉢が見られるようになるため、総量としては増加していることが読み取れる。

ⅤA(15世紀末～16世紀後半)以降も同程度の出土量が確認され、次第に甕よりも播鉢の占める割合が大きくなり、ⅤB(16世紀後半～17世紀初頭)になると甕はごく少数で貯蔵具としてよりも調理具として受容されていく。重根分類からは外れる器種ではあるが、16世紀前半に生産が始まるとされる徳利も各遺跡で出土している。関津城遺跡では16世紀後半の溝S6に切られる溝S2から備前焼徳利が出土しており、天正4年(1576)に廃城となる小谷城跡からも徳利が出土していることから、遅くとも16世紀後半には近江国にもたらされていたとみてよからう。また、この時期には大皿や小型壺、水指など付加価値の高い器種も見られ、器種のバリエーションにおいて最盛期を迎える。

しかし、ⅥA(17世紀前半)では佐和山城跡の播鉢の

他に確認できず、急速に流通量が減少したとみられる。当該期の遺跡の発掘調査件数が決して多くはないことも考慮せねばなるまいが、近江における備前焼のあり方にはV BとVI Aの間で大きな隔絶性を認めることはできよう。

資料の分布傾向についても触れておきたい。資料数が増加するIV A、つづくIV Bのものは近江各地で広く見られるが、とりわけ大津市域に目立ち、湖北地域では極めて少なく、湖西北部地域には見られない。V Aの資料は湖北地域にも広がり、数量の増加と併せて分布の広がりがうかがえる。V A・V Bおよびそれらと同時期に位置づけられる資料は、安土城跡・安土城下町遺跡・佐和山城跡・長浜町遺跡など湖東地域から湖北地域にかけての分布が密になる。

（2）流通と使用の実態—播鉢を例として—

a. 生産と使用のタイムラグについて

前節での検討により主に甕と播鉢について「どの生産時期の資料がどの遺跡でみられるか」という状況はおおよそ明らかになった。ただし、この結果がただちに生産地と消費地をつなぐ流通の実態をリアルタイムで示しているわけではないことには注意する必要がある。一例として関津城遺跡の資料を挙げておきたい。

関津城遺跡では礎石建物に伴う埋甕遺構から備前焼の甕が3点出土している。建物は火災により焼失したとみられ、焼失後の整地によって埋め戻された状況が確認されている（滋賀県教委ほか2016）。備前焼にはIV A・IV Bのものがあるが、個々の甕を掘え直した状況は確認されないことを考慮すると、遺構の形成時期はIV Bに引き寄せて15世紀前半～16世紀前半と評価できる。そのためIV Aの甕については生産と使用の間に大きなタイムラグが生じている（2）。

甕の場合、比較的耐用年数が長いことに加え、上記の事例のような埋甕遺構などでは使用期間がさらに長期にわたることも多い。そのため消費地への製品の供給、換言すれば新旧製品の入れ替わりが盛んな器種ではないといえる。

一方、食品加工のための道具である播鉢は甕に比べて耐用年数は短く、消費地にもたらされてから廃棄されるまでの期間も比較的短くなる傾向にある。資料自体の年代と遺跡や遺構の年代も齟齬は生じておらず、生産年代と同時期の流通、短期間での使用の実態を考えるのに適した器種と言えよう。ここでは対象を播鉢に絞って、近江における備前焼の流通と使用について検討する。資料の数量・分布・時期など前節で触れた事項ではあるが、播鉢に限定してみていくことで特徴をより鮮明なものとしたい。

b. 播鉢の出土傾向

まず、経時的な分布傾向を追っていくと、おおまかには近江南部から近江北部へと広がっている様子がうかがえる（図2）。特にV Bが出現するまで彦根市域以北では見られず、分布の偏りが認められる。また、湖北・湖西地域では

播鉢の出土例は確認できなかった。遺漏の可能性は否定しきれないが、少なくともごく少数に限られることは確かであろう。湖北地域においても甕・德利・大皿などは出土していること、先述したとおり、近江全域でみるとV B以降は播鉢が最もメジャーな器種になることを考慮すると、湖北地域においては同じ備前焼でも器種によって受容のあり方が異なっていたとみることができよう。

遺跡ごとの偏差という視点に立つと、佐和山城跡が注目される。一遺跡での出土点数が多くても2～3点となる中で6点の出土が報告されている。さらに出土した播鉢6点のうち5点が城下町地区のSD05・SD11から出土しているが、SD05とSD11はそれぞれが接続する溝で同時期に機能したことがわかっており、実質的に同一遺構から出土した資料として評価できる。

他の器種との関係についてであるが、備前焼の器種組成については、乗岡実氏が織豊政権と備前焼の関わりを述べる中で、近江の事例にも触れている。乗岡氏は安土城跡・長浜町遺跡・小谷城跡における備前焼は播鉢が目立たず、大皿・德利・水指などの茶陶や付加価値の高い複数の器種で構成されるという共通性を見出した（乗岡2020）。今回の集成の結果を見ても、全体の出土点数は少ないながら妙楽寺遺跡もこの傾向を示しているし、安土城下町遺跡も播鉢は含まれるが目立った存在ではない。先に触れたとおり、近江全体で見るとV B以降、播鉢が最主要器種となるが、各遺跡単位でみたときに播鉢が主体とならない組成は16世紀後半の近江における備前焼の受容のあり方の一つとして評価できよう。その一方で佐和山城跡では出土した備前焼は播鉢に限られており、上記の各遺跡での受容のあり方とは大きく異なっている。播鉢の優位性という点でも佐和山城跡の特異性が指摘できる。

播鉢のうち備前焼がどの程度の割合を占めるのかについても触れておきたい。佐和山城跡では東麓城下町全体で播鉢は全61点出土しているが、うち42点が瀬戸美濃焼、12点が信楽焼、7点が備前焼という構成であり、瀬戸美濃焼が圧倒的なシェアを占めている（滋賀県教委ほか2013）。安土城下町遺跡の十七地区21次調査を見ても、SX2から破片ベースで100点以上の播鉢が出土しているが、信楽焼が98点を占めるのに対し、備前焼はわずか1点となっている（近江八幡市教委2012）。このように備前焼の播鉢が比較的多く出土している遺跡にあっても、あくまで客体的な存在であったと言えるであろう。

4. おわりに

今回の集成の結果、当初想定した以上の出土事例を目にすることとなった。他産地の陶器と比べてみたとき、近江において備前焼は少数派であることに変わりはないが、少数ながら時期ごとの出土量・分布・器種などの傾向をある程度示すことができたと思う。

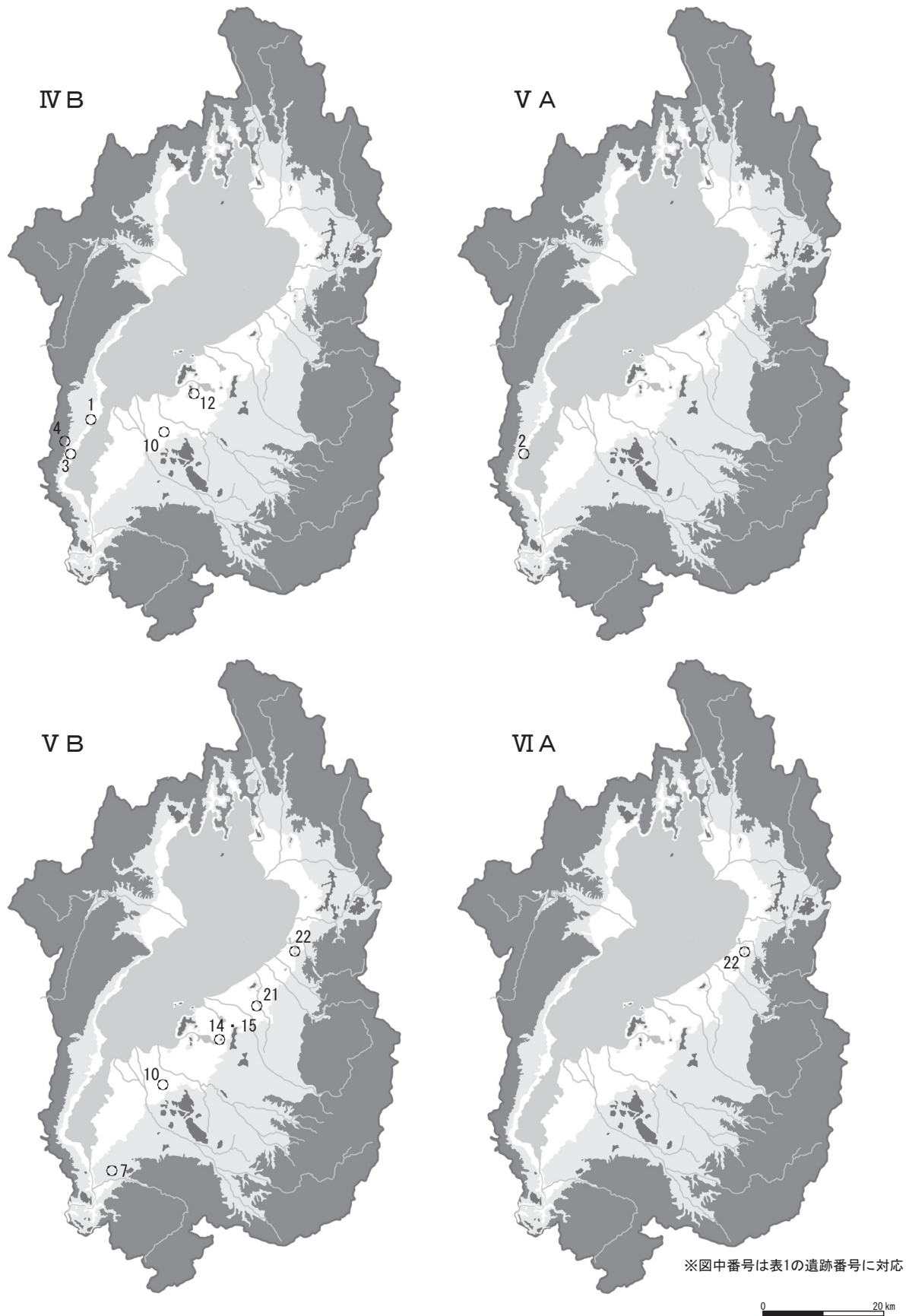


図2 備前焼擂鉢の出土遺跡の変遷

しかし、器種ごとの詳細な出土傾向については触れることができなかった。また、共伴遺物の検討から詳細な時期決定を試みることも今後の課題となるであろう。

本稿は「基礎集成」と銘打ったものの、県内全ての資料を確認し得たか甚だ心許ない。遺漏や資料についての誤認もあると思われる。大方のご教示を請う次第である。

註

- (1) 重根分類と同じように甕・播鉢を対象とした、より細分された編年案（乗岡 2000・2001・2002）もあるが、実見できていない資料が多いことから、本稿では大まかに特徴を捉えることができる重根分類を採用した。
- (2) 百済寺遺跡の埋甕遺構も同様で、Ⅳ A とⅣ B の甕があるが一括して埋設された状況や常滑焼の年代観（16 世紀前半）を考慮すると遺構の年代は 16 世紀まで下る（明日 2017）。

文献一覧（著者名・機関名 50 音順、刊行年順）

- 愛東町教育委員会（2003）『百済寺遺跡分布調査報告書Ⅱ』
- 愛東町教育委員会（2005）『鯉江城跡・百済寺遺跡発掘調査報告書』
- 明日一史（2017）「中世百済寺樽と埋甕遺構」『淡海文化財論叢』第 9 輯 淡海文化財論叢刊行会
- 安土町教育委員会（1986）『十七遺跡（Ⅵ）発掘調査報告書』
- 伊藤晃（2005）「備前焼の流通」『備前焼研究最前線Ⅱ』備前市歴史民俗資料館・備前市教育委員会
- 安土町教育委員会（1986）『十七遺跡（Ⅵ）発掘調査報告書』
- 湖北町教育委員会・小谷城址保勝会（1988）『史跡 小谷城跡』
- 近江八幡市教育委員会（1984）『堀上遺跡 余内遺跡 堂ノ内遺跡』
- 近江八幡市教育委員会（2012）『安土城下町遺跡十七地区 21 次調査概要報告書』
- 大津市教育委員会（1982）『埋蔵文化財集報Ⅰ』
- 大津市教育委員会（2013）『上仰木遺跡発掘調査報告書』
- 大津市教育委員会（2008）『坂本城跡発掘調査報告書』
- 大津市教育委員会（2016）『日吉神宮寺遺跡発掘調査報告書』
- 重根弘和（2016）「中世備前焼の分類と分布」『中近世陶磁器の考古学』第四巻 雄山閣
- 重根弘和（2022）『備前』『新版 概説中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編
- 滋賀県教育委員会・安土城郭調査研究所（1993）『特別史跡安土城跡発掘調査報告 3』
- 滋賀県教育委員会・安土城郭調査研究所（1994）『特別史跡安土城跡発掘調査報告 4』
- 滋賀県教育委員会・安土城郭調査研究所（1995a）『特別史跡安土城跡発掘調査報告 5』
- 滋賀県教育委員会・安土城郭調査研究所（1995b）『特別史跡安土城跡環境整備事業概要報告書Ⅱ』
- 滋賀県教育委員会・安土城郭調査研究所（1997）『特別史跡安土城跡環境整備事業概要報告書Ⅳ』
- 滋賀県教育委員会・安土城郭調査研究所（1998a）『特別史跡安土

- 城跡発掘調査報告 8』
- 滋賀県教育委員会・安土城郭調査研究所（1998b）『特別史跡安土城跡環境整備事業報告書Ⅴ』
- 滋賀県教育委員会・安土城郭調査研究所（2005）『特別史跡安土城跡発掘調査報告 14』
- 滋賀県教育委員会・安土城郭調査研究所（2007）『特別史跡安土城跡環境整備事業報告書ⅩⅣ』
- 滋賀県教育委員会（2009）『特別史跡安土城跡環境整備事業報告書ⅩⅥ』
- 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会（1982）『高月町上水道事業に伴う埋蔵文化財調査概要Ⅰ』
- 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会（1988）『宇曾川災害復旧助成事業に伴う肥田城遺跡発掘調査報告書』
- 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会（1989）『妙楽寺遺跡Ⅲ』
- 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会（2000）『上田上牧遺跡Ⅲ』
- 滋賀県教育委員会・（財）滋賀県文化財保護協会（2006）『植城遺跡』
- 滋賀県教育委員会・（公財）滋賀県文化財保護協会（2013）『佐和山城跡』
- 滋賀県教育委員会・（公財）滋賀県文化財保護協会（2016）『関津城遺跡』
- 柴田慎平（2020）「彦根市・古屋敷遺跡の再検討－出土遺物の整理調査から－」『人間文化』48 滋賀県立大学人間文化学部
- 多賀町教育委員会（2005）『敏満寺遺跡石仏谷跡』
- 多賀町教育委員会（2008）『敏満寺遺跡第 2 次調査』
- 長浜市教育委員会（2002）『長浜町遺跡第 1 次・第 2 次・第 18 次発掘調査報告書』
- 乗岡 実（2000）「備前焼播鉢の編年について」『第 3 回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会資料
- 乗岡 実（2001）「備前焼大甕編年レクチャー資料」『関西近世考古学研究』9 関西近世考古学研究会
- 乗岡 実（2013）「中世備前焼の水屋甕」『山陰中世土器研究』Ⅰ 山陰中世土器検討会
- 乗岡 実（2017）「備前焼の徳利」『中近世陶磁器の考古学』第七巻 雄山閣
- 乗岡 実（2020）『織豊政権と備前焼』『備前焼研究最前線Ⅲ』備前歴史フォーラム 2019 資料集 備前市教育委員会
- 米原市教育委員会（2006）『米原町内中世城館跡分布調査報告書』
- 守山市教育委員会（2001）『欲賀地区ほ場整備関連遺跡発掘調査報告書』
- 野洲市教育委員会（2008）『平成 18 年度野洲市埋蔵文化財調査概要報告書』
- 野洲市教育委員会（2016）『平成 27 年野洲市内遺跡発掘調査年報』
- 吉水眞彦（2006）「大津市坂本遺跡出土の貿易陶磁器」『貿易陶磁研究』26 号 日本貿易陶磁研究会

（やまぐち せいじ：調査課 主任技師）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.37 2024.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages